

聖書箇所:第一サムエル記31章1～13節

説教題:勇士たちは立ち上がった

1 サウルの死は神の罰なのか

サウルと三人の息子たちはペリシテ人との戦いの最前線に赴きます。三人の息子は戦死し、サウルも瀕死の重傷を負い、最期は自分の手で命を絶ちます。父親サウルとその息子であるヨナタン。きょうはこの二人の親子の關係に焦点を当てていきます。

まずサウルです。サウルが犯してきた不信の罪の数々を、私たちはこれまで何度も見てきました。ダビデに対するあまりにも理不尽な仕打ちを見て、何度も腹を立ててきました。ですから、サウルがこのような悲惨な死に方をしたことを聞いても、私たちは「サウルは神の罰を受けて死んだ」と言って納得します。第一歴代誌10章13、14節にもこうあるのです。「このようにサウルは主に逆らったみずからの不信の罪のために死んだ。主のことばを守らず、そのうえ、靈媒によって伺いを立て、主に尋ねなかった。それで、主は彼を殺し、王位をエッサイの子ダビデに回された。」

サウルに対してかなり厳しい評価をしているように見えます。いっぽう11、12節を読むと、また別の印象になります。「ヤベシュ・ギルアデの住民が、ペリシテ人のサウルに対する仕打ちを聞いたとき、勇士たちはみな、立ち上がり、夜通し歩いて行って、サウルの死体とその息子たちの死体とをベテ・シャンの城壁から取りはずし、これをヤベシュに運んで、そこで焼いた。」

サウルが神の罰を受けて死んだというのなら、ヤベシュ・ギルアデの人たちがしてい

ることをどう説明したらいいのでしょうか。このことを考えてまいります。

2 ヤベシュ・ギルアデの人々

(1) 勇士たちは立ち上がった

ヤベシュ・ギルボアの人たちはどうしてこんなに丁寧にサウルのことを葬っていくのか。

実はそれなりの理由はありました。サウルがまだ若かったときのことですが、アモン人と呼ばれる人々がヤベシュ・ギルアデの町を包囲するという事件が起きました。そのときアモン人はこう言って脅迫しました。「ヤベシュ・ギルアデの住民に告げる。おまえたちは全員右の目をえぐり出し、アモン人の奴隷となれ。さもなければ皆殺しにする。」

これを聞いてイスラエルの人たちはどうすることもできず、泣くだけでした。しかしサウルだけは違います。アモン人がひどいことをしていると聞き、激しく怒ります。イスラエル中に向かって叫び六万人を集め、サウルはヤベシュの人々を救い出すことに成功するのです。

ヤベシュの人々はこのことを忘れてはいませんでした。サウルがどんなにひどい王であつたかは知っていました。けれども、サウルが死に、そのからだか敵の城壁につるされ、恥をさらしているということを聞かされたとき、黙っていられないのです。夜通し歩きおし、危険を冒してでもなきがらを引き取りに行かなければと強く動かされていきま

す。

(2) ダビデの評価

でも疑問は晴れません。「確かにサウルは少しは良いことをしたかもしれない。でも聖書にはサウルは主に逆らったみずからの不信の罪のために死んだ。主は彼を殺した、とある。サウルはやっぱり神の罰を受けて死んだのだ。」

私たちはどうしても神の罰にこだわりたい。では、12 節最初にあることばはどうなるのでしょうか。「勇士たちはみな、立ち上がり、夜通し歩いて行った。」「勇士たち」と書いてある。聖書は、あきらかにヤベシュの人たちがしたことを高く評価しています。単なるサウルに対する恩返しだということではなさそうです。

それだけではありません。ダビデも後にこう言うのです。第二サムエル記2章5、6節。「あなたがたの主君サウルに、このような真実を尽くして、彼を葬ったあなたがたに、主の祝福があるように。今、主があなたがたに恵みとまことを施してくださるのように。この私も、あなたがたがこのようなことをしたので、善をもって報いよう。」

聖書は繰り返し、ヤベシュの人たちが取った行動を高く評価しています。これには何か大切な意味があるようです。

3 神の救い

(1) 「主はサウルを殺した」の意味

きょうは結論から述べます。驚くかもしれませんが神はサウルを愛しております。サウルは神の罰を受けたわけではありません。むしろ神はサウルを救っています。だから、神はヤベシュ・ギルアデの人々を勇士と言い、ダ

ビデも「主君サウルに真実を尽くした。主の祝福があるように」と評価します。

では第一歴代誌にある「主はサウルを殺した」ということばはどう理解すればよいのでしょうか

たとえばこんなふうになると思います。

川で溺れている人がいたとしましょう。そばにいた人が助けようとして手を差しのべたとします。しかし溺れている人は「おれは溺れてなんかいない。おまえの助けなどいらぬ」と言い張ったとします。その結果、その人は溺れて死んだとしましょう。この場合、死んだのはだれの責任ですか。助けようとした人の責任ですか。そんなことを言う人はいません。助けを拒んだ自分の責任。だれもがそう考えます。サウルの場合もこれと同じです。

神はサウルの生き方をご覧になり、常に助けの手を差しのべてきたのです。時には祭司サムエルとを通し厳しく警告し、またあるときはダビデを通して主の御心を示そうと努力してきた。でも、サウルはそのいつさいの助けを無視してきた。サウル自身がみずからの手でこのような結末を招きました。仏教のことばで言えば「自業自得」。そう言って、だれもが納得するはずで。

しかし聖書は違う言い方をします。「主がサウルを殺した」と言います。先ほどの例で言えば、川で溺れている人に手を差しのべて助けようとしたのに助けられなかった。サウルが死んでしまったのは、すべて神ご自身に責任があると言っているのです。

(2) 父サウルと息子ヨナタン

どうして神はそんなことを言われるのでしょうか。仮にサウルが死んだのは神の責任で

あるとすれば、そこからなにが言えるのでしょうか。

今度は息子であるヨナタンに目を留めます。ヨナタンは、父であるサウルに最期まで忠実に従いました。勝ち目のない戦争であったにもかかわらず、イスラエルのために戦い死にました。もしサウルが神の罰を受けて死んだというのなら、サウルに忠実に従ったヨナタンはどうなりますか。まったく愚かな死に方をしたことになりませんか。愚かな父をもったヨナタンはかわいそうな運命だった。そういう結論にしかならない。

ヨナタンのことは他人ごとではありません。私たちだって、自分の親のことを見て複雑な思いを抱いています。父親が酒飲みで家庭内暴力をふるう人だったので、小さな時から苦労してきた。そんなふうに悩んでいる方が沢山います。母親がこんな人でなかったなら、私の人生はもっとすばらしいものになっていたはずだ。そう思っている人は意外に多い。

そんなふうに、父や母の中に見ていた欠点や弱さを、若いときは一方的に憎んできました。しかしやがて自分が子供を持つようになると、気がつきます。親と同じ欠点や弱さを自分も持っている。聖書に「父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼす」(出エジプト20章5節)とあるとおりなのです。

ヨナタンの親はひどい人で、その親が神の罰を受けて死んだ。もしほんとうにそうであるなら、ヨナタンはどうなるのでしょうか。ヨナタンもサウルと同じ弱さをうちにかかえていたのです。そうしたら、ヨナタンは救われないという結論になってしまう。

これは他人事ではありません。私たちにだって同じことが起きてしまいます。私たち

も親と同じものを私たちは受け継いでしまっているからです。これではどこに救いがあるというのでしょうか。

(3) 決して報いを失うことはない

しかし神が、サウルが死んだ責任はご自分にあると言われた瞬間、すべてのことにまったく新しい光が当てられました。

私たちはサウルのことを見て、ひどい王様だと思ってきました。しかし、考えてみればサウルをしていることは私たちそのものではないですか。神がしきりに手を差しのべ「この手につかまって救われなさい」と言われたのにもかかわらず、「助けなんかいらぬ」と拒んできた。御子イエス・キリストが来られたときでさえ、「あんな男に何ができる」と十字架につるされたイエスを見てあざ笑っていた。

そんな私たちはどうなったか。死が目の前に迫ってくると、急に恐ろしくなり、「自分は死んだらどこに行くのか」と言いだします。中には「自分はあの罪この罪で死んだら地獄に落とされるのではないか」と真剣に悩む方もいます。

自分が歩んできた人生をふり返れば、罪だらけ、何も良いことなどしてこなかった。こんな私など天国に入れない。多くの方は心の片隅にこんな不安をかかえておられます。そんな不安を見透かして、ある宗教では、救われて天国に入るために善行を積みなさいと勧めます。

キリスト教はどうか。神はサウルでさえ救おうとされます。彼の人生はそのほとんどは罪だらけでした。そんなサウルでも、若いときにヤベシュの人たちを救おうと思った時があった。神はその事を忘れない。人生の中

で千の悪を行ってきたとしても、神はその中にごくわずかでも人の痛みに悲しむことがあったなら、もうそれだけであなたは天の御国に救われていくのだ。そのような約束をしてくださるのです。

「あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。」(マルコ 9:41)

このことばのとおりにはサウルは救われていきます。

そうするとヨナタンはどうなるか。ヨナタンの死は決して無駄な死ではなくなる。愚かな父親をもってしまった悲しみをヨナタンはかかえておりました。ヨナタンも自分の中にサウルと同じ弱さと罪を抱え込んでいると苦しみました。しかし神はこの親子の間に介入して下さり、大きな恵みを施していくのです。主は、たとえどんなにひどい親であっても、すべての責任を引き受けてくださると言ってくださいます。

サウルのなきがらをとりはずすために勇士たちが立ち上がった。これこそ、神がどれほどにサウルのことを愛しておられたのかを示すことばになります。サウルがそうであるなら、ヨナタンも同じ。

主の恵みがこのように注がれることを覚え、御名をあがめます。